
あなたにあいたい

嘉月天空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたにあいたい

【Nコード】

N6223A

【作者名】

嘉月天空

【あらすじ】

一話一話がそんなに長くない、いわば短編集です。話自体に関連性もないので、これからお読みになっても構いません。全8話で完結済みです。テーマは各話の頭文字を繋げた言葉。ので、恋愛モノ多めです。読んでいただければ幸いです。

雨

三ヶ月前に付き合い始めた彼と別れたのは、久しぶりに晴れた六月のある日。

メールと電話は頻繁にしていたけど、お互い何かと忙しく、なかなか会えなかった。何とか予定を合わせて、久しぶりにデートの約束を取り付けた日曜日。

先週買ったばかりのワンピースに、彼に褒めてもらったお気に入りミニスカート。誕生日に、と買ってくれた鞆を持って、あたしは待ち合わせ場所に行った。

あたしは、彼もデートを楽しみにしていると思ってた。

けど待ち合わせに現れた彼は、見たことのない女の子を連れていた。

「悪いけど、そーゆーコトだから」
それってどーゆーコト？
意味わかんない。

彼の連れていた女の子がくすつと笑った。
あたしはその場に残された。

*

しばらく 実際には何時間かみたかったけど ぼんやりと立っていたあたしは、やっと自分が携帯を手を持っているのを思い出した。

ずっと握り締めていて固まっていた右手をほぐし、最もかけなれた、親友の番号に電話をかける。

相手はなかなか出なかった。延々と呼び出し音が鳴って、留守番電話サービスに繋がった。普段なら腹立たしいその声も、あたしはぼーっと聞き流し、声が聞こえなくなったのに気付いて、ようやく録音が始まっていると思い至った。

何が言いたいのがよく分からなかったけど、何か言わなくてはならないような気がして、とりあえず言った。

「……サチ？ えっと。ユイだけど……何かあたしコージに振られたみたい」

他に言う事がなくなったので、それだけ、と呟いて電話を切った。

切ってから、ばかばかしい事をした、と後悔した。だからといって、今更取消もできない。

こんなものサチに言っただって他の友達に言っただって仕方ない。彼女たちに何かして欲しいわけじゃないし、言っただからどうなる訳でもない。

もつとずっと、自分は冷静で落ち着いた人間だと思っていたけど、実は動揺しているのかもしれない。

でも涙は出ないな、と思った。

そこから動く気にもなれなかったので、そのまま立っていたら聞き慣れた着信音が聴こえてきた。コージとお揃いにしてた着信音。

手元を見ると、液晶に“ヤマザキ山崎紗智花”という文字とサチの顔写真が表示されている。ほとんど無意識の動作で電話を取って、耳に押し当てる。

『ユイ？ 大丈夫？ 平気？ 今どこ？』

もしもし、という間もなく、サチが立て続けに言った。

「うん。平気だよ。何で？」

「何でって……ねえ、今どこにいるの？」

どこだっけ。えっと。

「新宿」

「……の、どこ！？」

「交差点？」

目に入っただけで言ってみる。

「ちょっとユイ、本当に大丈夫？」

「ダイジョーブだよ。変な電話してごめんね」

「そんなの良いから、アンタいつ家帰る？ 今日バイト終わったら行くからさ」

「じゃあもう家に帰るよ」

今朝は慌てていたから、部屋は荒れ放題のはずだ。あいにく一人暮らしなので、勝手に片付けてくれる人もいない。サチが来る前に簡単に掃除をしようと思った。

「わかった。あとちょっとでバイト終わるから、すぐ行くね。待ってんのよ？ そうだ。夕飯作っただげるよ。美味しい奴。期待しててね！」

急に明るくサチが言うから、どうしたんだろうと思ったけど、あたしはありがとう、と言って電話を切る。

それからもう一回まわりを見回した。

知らない内に日が暮れかけている。待ち合わせは午前十時だったから、ずいぶん長かった計算になる。あんまりそんな気はしない。

帰らなきゃ。

ずっと立っていてこわばった足は、なかなか思っように動かなくて、あたしはよたよたと歩き出した。

切符を買って山手線に乗る。夕方だから、人が多かった。戸口の前に立って、扉によりかかった。よりかかった扉が開く時だけ、そこから離れた。戸が閉まると、またよりかかる。

そんな事を繰り返していたら、また誰かから電話がかかってきた。誰だろう、と思つて覗き込んだ液晶にはまたサチの名前。

「もしもし」

『ちよつとユイ！ あんだどこほつつき歩いてるの！？ 何で新宿にいるあんたが私より帰るの遅いのよ！』

え？ と窓の外を見ると、いつの間にやら月が空に昇っている。携帯の時計を確認する。大分時間が経っていた。

扉の上のモニターを仰ぎ見て、あたしは言う。

「今、渋谷だからもうちよつとかかるかも」

『はあ！？ 何で渋谷なんかにいるの？』

「……………寝過ぎしちゃったのよ」

座席に腰かけてフネをこぐ中年の男を見て、とっさにそう言い訳する。

『じゃあ、前のファミマにいるから帰って来たら声かけてね』

「うん、ごめん」

言うだけ言つて電話を切る。

席はいくつか空いていたけれど、座る気にはならなかった。

＊

家に帰ると、食材も買ってきてくれていたサチが夕食を作ってくれた。

“美味しい夕飯”という言葉に偽りはなく、あたしは食べ過ぎるくらい食べた。サチは片づけまでしてくれて、その後両親の待つ自宅に帰った。

それから一週間、あたしは今までと何の変化もない生活を送った。少なくとも自分ではそう思っていた。

強いて言うなら、コージとのメールと電話のやり取りの時間がなくなつて、部屋でぼんやりする時間ができた。

その日も、あたしがぼんやりしていたらサチから電話があつたのだ。

『もしもし、ユイ。元気ー？』

「あ、サチ。どーしたの？ 鼻声だよ？」

『実は風邪引いちゃってさ。せつかくの天気の良い日曜なのに暇でしようがないのよ。相手してよー！』

無理に情けない声音を作るサチにあたしは声をたてて笑つてしまふ。

『ひどーい！ さっき天気予報見たら、もう今日でこの所の良い天気は終わりなんだって。梅雨前線が近付いてるとかで今日の午後からまたしばらく雨が続くらしいよ。嫌よね』

そういえば、この一週間雨はふらなかつたな、とあたしは窓の外を見た。

サチの言う通り、そろそろ雨の降り出しそうな雲模様だ。

『せっかくいい天気だから買い物でも行こうかと思えばさ』

「そーねー。雨って嫌いじゃないけどうつとうしいのよね」

相槌を打っている、携帯電話の向こうから、「紗智花！ 寝てなさいって言ったでしょ！！」と怒鳴り声が聞こえた。

『はいはいはい！ わかりました！ もー。ごめんユイ。切るね』

「うつん。気にしないで。お大事にね」

『うん。ありがとう。……今切ってるでしょ！？ 見てわかんない！？』

サチの怒鳴り声を最後に電話が途切れた。

あの元気があれば大丈夫そうだ、と微笑む。

再び窓を見ると、先刻より薄暗くなっているような気がする。

突然、窓辺のチェストの上に置いた写真立てが伏せられている事に気がついた。毎朝カーテンの開け閉めにチェストの前に立っていたが、気付かなかった。

いつから倒れてたんだろう。

思っ、写真立てを手に取った。

写っていたのはコージとあたし。

それを見て、あたしは写真立てを伏せたのが誰か解った。一週間前夕飯を作りに来てくれた時に、サチが気を利かせてわざと伏せたのだろう。

写真の中のコージとあたしは笑っていた。

写真を撮った二週間後には別れているなんて思ってもいない表情。

この時から既にコージには別の女がいたのだろうか。

この時からコージはあたしと別れることを考えていたんだろうか。
コージの笑顔を見つめて、あたしは答えの出ない疑問を浮かべる。

あたしまだコージが好きなんだ。

何で今まで気付かなかったのか、あたしは唐突に理解した。

まだ、好きなんだ。

あたしは彼からサヨナラもキライも聞いてない。言われたも同然
だけど、それでも聞いていない事には違いない。

かすかな音を立てて、雨粒が窓ガラスにぶつかった。

そのまま雨は勢いを増し、一週間の鬱屈を晴らすように降り注ぐ。

窓は閉まっている筈なのに、あたしの頬にも熱い雨粒が流れた。

夏（前書き）

やや女性の同性愛的描写がありますので、チヨットでもそんなのあったら嫌！ という方はご注意ください。

ただし、逆に期待するほどのナニもありませんので、そういう意味での期待もしないで下さい。

夏

その日は、朝から頭痛がした。

＊

いつも通り高校に向かう為に家を出たが、途中で気分が悪くなつて路上に座り込んだ。

夏の熱気がじわじわと伝わってくる。

しばらくそうしていたが、道行く人にじろじろ見られるのが嫌で、近くの公園まで行った。

朝の公園は人がいない。ぼんやりとベンチに座るのは嫌いじゃない。木陰に入っているベンチに私は深く腰掛ける。

上を見ると、青ざめた空に白い月が見えた。太陽は眩しすぎてそちらを見ることがすらできない。日差しはきついというよりは鋭く、刺し貫くような激しさを持っていた。

近年稀に見る猛暑　だっけ。

今朝の天気予報を思い出して口の中でだけ呟いた。

上を向くのが辛くなってきたのでうつむいた。体勢的にはこの方が楽だ。

背中まで長くたらし髪が顔の横にさらさらと落ちてきた。カーテンが閉められたように視界が狭められる。

私はただひたすら、口腔に溜まる唾を何度も飲み下していた。気持ちの悪さごと嘔下しているようで、更に気分が悪くなる。しかし、止める事もできずに、その動作を繰り返す。

ただそれだけのことをどのくらい長くやっていたのか、苦しい中でぼんやりと「もう今日は遅刻だろうな」と思った。

「大丈夫？」

不意に誰かの声がした。

のろのろと顔を上げると、同じ学校の制服が見えた。スラリとした足と、スカートの裾。顔は見えない。そこまで視線をあげるのが辛かった。

「……大丈夫です」

喉が引きつって、かすれた声が出た。

「気分が悪いの？ 日差しにあてられた？ 暑いからね」
ハスキーな低音。科白とは裏腹に、口調は涼やかだ。

ずっと、視界にあつた膝が折れ曲がり、目の前に顔が現れた。

まっさきに目に入つたのは目だった。

長いまつげに縁取られた目が、上目遣いにこちらを見上げてくる。整った顔立ちの中に、媚びた様子も、なやかな風もしない力強い瞳。それに寄り添うかのように引き締まった唇は赤い。

「化粧……してるんですか？」

思わず間の抜けた事を訊ねてしまった。

私の　そしておそらく彼女も　通う高校は、規則にうるさい

進学校なのだ。進学校故か、校風か、堂々と校則を破るような生徒はなかない。

彼女は軽く目を見開き、にやり、と笑った。
その動作の為に、短く切った彼女の髪が揺れる。

「可愛いね」
わけがわからない。

彼女は立ち上がると、私の隣に腰掛けた。
気分は、まだよくならない。嘔吐感にも似た吐息を飲み込み、私は散々悩んで隣の彼女を無視することにした。
そんな事より気分が悪い。

ふ、と息をついた瞬間、肩をつかまれ強く引き寄せられる。
言葉を上げる暇もなく、私は彼女の太ももに頭を乗せる格好になっていた。

「……なに……」
とつさに伸ばした腕も絡めとられる。振りほどこうにも力が出ない。

「じつとしてなよ。気持ち悪いんでしょ」
名前も知らない彼女は私の顔を覗き込んだ。

「止めてください」
「いいじゃん」
私の言葉には取り合わず、そっと手のひらを私の額に当ててきた。ひやりとした感触が伝わってくる。正直気持ちよかった。

「目、閉じてたら？」

そういう彼女を無視して、逆に私はまじまじと彼女を見つめた。

小作りな顔。肉のそげた尖った顎と、それを縁取るように落ちて
いる短い黒髪。日に晒すのがもったいないような白い肌。通った鼻
筋を中心に、印象的な瞳と唇。

こういう人を美人というのだろう、と思った。

大きな黒い瞳が面白そうにこちらを見下ろしている。

「アタシの顔何かついてる？」

冷たい手の感触に、少し気分のよくなった私は苦笑しつつ言った。

「……目と鼻と口」

「っははは！ アンタやつぱ面白いね。気に入っちゃった」

そこまで笑われると思っていなかった私は、涙を流して笑う彼女
にぎよっとする。

「気分ちよつとは良くなったみたいじゃん」

「……ええ、まあ……おかげさまで」

「なにそのとつてつけたような返事」

唇を尖らせてそう言いながらも、額におかれた彼女の手は優しい。

「良いんですか？ 学校」

訊ねた私に、彼女はあっけらかんと言う。

「いいんじゃない？」

「よく……ないですよ」

出欠は内定に響く。彼女の学年はわからないけれど、下手をした
ら将来にかかわる。

「ん、てかサボろうとしてここ来たんだしね」

その言葉を、私はすんなりと納得してしまった。自分の高校に堂々とサボる人間がいるとは初耳だったが、そうでもしなければこんな通学路に関係のない公園でへたりこんでいる自分に会えるはずもない。

「少し寝たら？」

「でも……」

そこまで迷惑はかけられない、と続けかかった唇を押さえ、額に置かれていた手を目の上まで移動させる。

「大丈夫、」

私はなぜだか自然に目を閉じてしまった。

*

ふつと目を開けると、間近に大きな瞳があった。

眠るつもりはなかったのに、いつの間にか眠っていたらしい。彼女は私が目を覚まして、こちらをじつと覗き込む。

「……あの、」

顔を背けることもできなくて、思わず言うと、彼女は微笑みながら顔を引いた。

「いやーホント可愛い顔してるな、と思って」

自分より綺麗な顔をした人に言われたくはない。

「可愛くないです」

言いながら身を起こして、彼女の隣に座りなおした。
気分は大分よくなっていた。

「十分に可愛いよ。昼のお月さま」

「は？」

思わず聞き返す。意味が解らない。

彼女は人差し指で高く空を指した。

「今にも消えそう」

私はわけもわからずムっとする。確かに身体が丈夫な方とはいえないが、そう簡単に消え去る程か弱いつもりもない。

「ならあなたは夏ですね」

彼女はちよつと目を見開いた。

「夏？ 季節の？」

ただ何となく言っただけの私は彼女の素直な反応に驚く。

「そう。夏みたいにハッキリした自己主張の激しい人 私とは正
反対ですね」

慌てて無理矢理そうこじつけると、彼女は爆笑した。

「それ良い！ 今度使わせて！」

一体何にだろうか。

眉根を寄せる私に、彼女はまた笑った。

「ご褒美に教えてあげよう。アタシの名前、夏^{ナツ}って言うの」

「夏……」

何とはなしに繰り返す。

「そ。時代劇みたいでしょ？」

皮肉気に笑って立ち上がる。

「大分気分良くなったみたいじゃない。良かった」
私は慌てて礼を述べた。

「ありがとうございます」
ぺこりと頭を下げる。

「良いつてば」

「でも、お礼を何か……」

彼女はとりあわずに歩き出す。

が、数歩歩いてから、もう一度戻ってくる。

「やっぱお礼だけでもらっとくわ」

「じゃあ、連絡先を教えてください」

私はメモを取るうと携帯を開きながら言った。電話帳の新規登録画面にたどり着くより早く、彼女が言う。

「秘密。」

言うが早いか彼女の顔が近づき、すばやく私の唇に自分の唇を押し当てた。

「ッ」

咄嗟の事に反応できずにいると、彼女は近づいてきたのと同じすばやさで離れ、にこやかに手を振って公園を出て行った。

情けないことに、私が動けるようになったのは彼女の背中も見えなくなっただけだった。

どういってもいいだろうか。

“ やっぱお礼だけでもらっとくわ ”

彼女の科白を思い出す。

よもやさっきのキスはお礼の代わりだったのだろうか。

私は首を左右に振る。

いやいや、男のヒトならともかく 男性が同じ事をしたら容赦なくひっぱたいだろうが 。

いつの間にやら、一握り残っていた気分の悪ささえ吹き飛んでいた。

彼女の去った方を見る。

突拍子もない変な人だったが、もう一度、彼女と話がしてみたいと思った。

竹

竹のお花が咲くのはとっても珍しいの。
そう教えてくれたのはアキちゃんだった。

じゃあ竹のお花が咲いたら一緒に見に行こうよ。
そう言ったのはわたし。

*

竹は今年、黄緑の花をつけた。

*

わたしは都内の大きな公園の、大きな大きな噴水の縁に座って、
アキちゃんを待っていた。

一番最初、アキちゃんに会った場所がこの噴水。
それ以来、アキちゃんと待ち合わせるといつもここ。

わたしの目の前を小さな男の子と女の子の集団が走って行った。
一緒に遊びたかったけど、わたしはじっと我慢をする。

だってわたしはアキちゃんを待っているのだ。勝手に遊びに行っ
たら、アキちゃんは怒ってしまうかもしれない。
わたしはアキちゃんが大好きだったから、嫌われなくなかった。

さっきの男の子と女の子の集団が戻ってくる。こっちに向かって
走ってくるので、わたしは遊ぶのに誘われるのだと思った。

誘われたらどうしよう。

「ごめんなさい。アキちゃんを待ってるから、一緒に遊べないの。うん、そう言おう。」

心の中でそう決める。

男の子と女の子の集団はあつという間にわたしの目の前にやってきた。わたしは足が遅いので、早いなあと感心した。

集団の中で一番偉そうにしている男の子が一步前に出た。みんなのリーダーだろう。

「やーい、ババア！」

わたしはびっくりしてしまった。

あんまりびっくりして声も出ない。

彼らは、ひたすらはやし立てる。

遠くから、女の人が走ってきた。

「コラ！ タケルやめなさい！！」

リーダーの男の子のママのようだった。怒鳴りつけられた男の子と、その他の子どもたちは、わーっと声をあげながら好き勝手な方向へ走って行ってしまった。

男の子のママがわたしの前に立ち、申し訳なさそうに頭を下げる。

「本当にごめんなさい、ウチの子が……」

「大丈夫です」

わたしは答えた。うん。大丈夫。ババアなんて言われると思ってなかったからびっくりしただけだ。

男の子のママがいなくなると、わたしは足をぶらぶらさせる。アキちゃんはなかなか来ない。

探しに行ったほうがいいかもしれない。

今朝もテレビで誘拐事件についてやっていた。小さい子どもが狙われるらしい。アキちゃんも、途中でそんな誘拐犯につかまってしまったのかもしれない。

わたしは心臓がときどきするのを感じた。

もしそうだったらどうしよう。

アキちゃんは助けを求めているかもしれない。

でも、もしもそうじゃなかったら？

わたしがアキちゃんを探しに行った後、アキちゃんがここに来たら？

わたしは困ってしまった。
どうしよう。

そうだ。アキちゃんのおうちに行こう。行ってアキちゃんを迎えに来たよ、と言おう。

アキちゃんは、もしかしたら約束をすっかり忘れてまだおうちにいるのかもしれないし。

わたしは噴水の縁から立ち上がって、アキちゃんのおうちへと歩き出した。

*

わたしはアキちゃんの家に行くまでの間に、アキちゃんとすれ違ったら大変だ、と辺りを見回しながら歩いた。

周りを見て歩いたから、普段から遅いわたしの足が、もっと遅くなる。

でもわたしは一生懸命歩いた。

ゆっくりだったので、アキちゃんのおうちへの道のりが遠く感じる。

いっぱい歩いた気がして、足がくたくたになった。

アキちゃんのおうちは、広いお庭のついた大きなおうちだ。マンション暮らしのわたしのうちとは違う。

アキちゃんのおうちは、長い長い塀が続いていて、わたしはいつかそんなうちに住みたいと思っていた。

だけど、今日はその長い塀が白と黒の幕で覆われている。

だれかのいたずらかしら、とわたしは思った。

入り口まで行くと、白いテントがあつた。幼稚園の運動会の時、ホーソーセキのあるようなテントだった。

黒い服の大人の人がたくさんいた。

わたしは何があつたのか、アキちゃんに聞こうと思って、一生懸命アキちゃんを探した。

アキちゃんが約束にこれなかったのに、関係がある気がしたのだ。

そのうち、たくさんの大人の人に囲まれた、黒い服のアキちゃんを見つける。

わたしはアキちゃんに近寄った。

「アキちゃん、どうしたの？」

アキちゃんはびっくりしてわたしの顔を見る。

「ねえ、今日公園に来られなかったのはこのせい？」

アキちゃんのママもびっくりしたようにわたしを見た。
どうしてだかわからない。

いつも元気なアキちゃんも、ぽかんと口を開けながら立っているだけで、わたしの質問に答えてくれなかった。

突然、わたしは肩を強く引かれて、強引に後ろを向かされた。髪をまとめて黒のスーツを着た女の人が立っている。

「おばあちゃん！　しっかりして下さい！　その子はアキノさんじやなくて孫のユウカちゃんよ」

ユウカちゃん？　アキちゃんにこんなにそっくりなのに、アキちゃんじゃないのかしら？　じゃあアキちゃんはどこ？

目の前の女の人にそう聞こうかと思ったけど、女の人があんまり怖い顔をしていたから、わたしは怖くなって、女の人の手を振り払った。

「急に病院を抜け出したって聞いて心配したんですよ！？　私です、マキコです。シンイチさんの妻の。わからないんですか？　おばあちゃん！」

やはり黒い服を着た小さな女の子が、わたしの服の袖を引いた。

「おばーちゃん。どうしたの？」

「おばあちゃん、貴女の孫のサツキよ？　わかるでしょう？　おばあちゃん、しつかりなさって！」

何を言っているのかわからない。
アキちゃんはどこだろう。

おうちの中かもしれない。

わたしは、再びわたしの肩を掴んだ女の人の手を振り払って、アキちゃんのおうちの中へ入った。

おうちの中は薄暗くて、お仏壇のにおいがした。

広いお座敷の奥にお花がたくさん飾られ、お線香がたくさん供えられていた。真ん中に、誰かの写真が飾ってある。着物を着たおばあさんの写真だった。

アキちゃんはいない。

どこに行ってしまったんだろう。

他の場所を探そうとすると、さっきの黒いスーツの女の人がわたしの手を掴んだ。

「おばあちゃんいい加減にしてください！ みんな心配してるんです。病院に帰りますよ！」

いやいやをするのに手を離してくれない。

「アキノさんには私が代わりにお線香をあげましたから、ね？」

嘘つき。お線香があがってるのはアキちゃんじゃない。

嘘つき。アキちゃんは約束を守ってくれない。

アキちゃん、どこへ行ったの？

匂い（前書き）

「匂い」はエッセイです。

エッセイがお嫌いな方はご注意ください。

匂い

認識番号：T - 13G5H753BI4 - 8697956322

547

個体名：シスカ 静

マスター：Law

タイプ：汎用ヒューマノイド

私がマスターに与えられた個体情報はそれだけ。

私は22万2516・4時間前　約25年前　、人間で言うところの家政夫としてマスターに製作された。

マスターはヒューマンインターフェイスの権威で、しかし人間嫌いが高じて、隠遁生活をおくっていた。

私を造った理由も、人と接したくないからだった。

私を造ったその時でさえ、既にマスターは高齢だった。それから25年近くも経ったのだ。人間の平均寿命を考えると、長生き過ぎるくらいだったろう。

マスターは頻繁に「人間嫌いの私が長生きをするとは、人生とは何と皮肉な事だ」と言っていた。

*

そのマスターの一切の生命活動が、昨夜停止した。

哀しいという感情はインプットされていなかったのだから、人間は人が死ぬとその様な感情を持つのだという　、私はデータベースから「葬儀」という項目を引き出し、その準備を始めた。

データベースには、最近の流行は宇宙葬だと書かれていたが、マスターがそれを望むとは思えなかった。マスターの思考パターンから鑑みるに、火葬ないし土葬で、地に埋められる事を望むだろう。

生憎、マスターの遺体を火葬するだけの火力と空間を持った装置がなかったため、私はマスターを土葬にする事に決めた。

マスターに防腐処理を施し、氷室 研究所の一施設であるに安置し、私は棺を買い求めに街へ降りた。

幸い、マスターの研究費用兼生活費として国家から支給されている金にはまだ余りがあったので、金銭的な問題はなかった。

棺を買い、郵送を頼むと、私は帰宅の途についた。

途中花屋を見かけ、葬儀に花を飾る習慣もあるという事を思い出す。

マスターが花を好むとは思えなかったが 現にマスターの屋敷内で花を見た事はない そのような習慣があるならば、と花屋に立ち寄った。

*

「はい、いらっしゃい」

茶色の髪の推定25歳前後の女性が、勢いよく言う。

言うてから、青い瞳で私をまじまじと見つめた。

「……ヒューマノイド？」

本人は小さな声で言ったつもりだろうが、人間とは聴力の異なる私にははっきりと聞こえた。

確かに、私は一般的なヒューマノイドに比べて、ヒューマノイドめいた部分がない。マスターに言わせれば、人間臭く造った、この事だ。

しかし、人間にはごく珍しい青銀の髪と紫の瞳は私を人でないものだと言っているようなものだった。

「花を下さい」

私は少しポリウムを上げて言った。

私には理解できないが、時折女性が私を見て、頭に血を上らせる事がある。マスターは怒っているのとは違うのだ、と言っていたが、私には未だにその差がわからない。

「……………あ、ハイ。何のお花を？」

しばし硬直していた女性には、更に顔を赤くしながら私に尋ねた。私はその様子を見て、少し声のポリウムが大きかったかもしれない、と考えた。

しかし、それ以前に何の花を購入するか考えていなかった私は、沈黙した。

「……………考えていませんでした」

正直に告白する。

「えっと……………じゃあ、どなたに贈る花なのかしら？　それともご自分用に？」

「マスターにです」

「失礼ですけど、貴方のマスターはご病気か何か？　それともお祝い事かしら？」

私は瞬間的に考える。病気では、ない。祝い事でも、ない。

「どちらも違います」

「貴方のマスターは男性？ 女性？」

「男性です」

「そうね……あ、年齢はおいくつくらいの方？」

「102歳と8ヶ月と12日でした」

「まあ、ご高齢なのね」

言いながら女性は首を傾げた。

じゃあ何で？

疑問が顔に表れているような顔だった。

しかし、私はその疑問に答える義務がないので 訊かれなかったからだ 沈黙を守る。

「何か好きな花はありますか？」

質問の主語が曖昧だったが、マスターにも私にも好きな花はないので「ありません」と答える。

「そうね、じゃあこれはどうかしら」

そう言って女性が手に取ったのは大輪の百合だった。

「いい匂いでしょう？ 今ちょうど時期なのよ」

食物にこだわりのなかったマスターは、私に味覚と嗅覚を与えなかった。その為、匂いはわからなかったが、傷もなく大きく咲いた花は、美しいと言われる条件を満たしているのは理解した。

「それを下さい」

「何本お求めですか？」

私は先刻買った棺を思い出す。マスターは高齢であることもあり、一番小さな棺でも余ってしまうくらいだった。棺とマスターの体積

を比較し、花屋に置かれた百合を見る。

「そこにある百合をすべて下さい」

そのくらいないと、棺に入れ、周囲に飾る分に足りないだろう、という判断だった。

「……………は、はい！ 毎度ありがとうございます」

私は料金を支払い、それも配達を頼んだ。

*

最後に役所にマスターの死亡を届け出た。死亡届は受理されなかった。ヒューマノイドが届出をするには、二人以上の医師の診断書が必要なのだという。知らない内に法改正が行われていたようだ。

すぐさまデータベースを確認すると、1週間前に緊急で改正が行われ、区切りのいい今日から施行となったようだ。法律の項目は1ヶ月に一度、まとめて変更がなかったかどうかのチェックをする為、気付かなかったらしい。

「申し訳ありませんね、改正前はヒューマノイドの申告でも構わなかったんですが、ヒューマノイドを使った悪質な保険金詐欺もありますし、最近はその……物騒な事件が起こり易いものですから」

“人間臭い” 私に罪悪感を覚えたのか、受付の男性はもごもことそう言った。

物騒な事件とは、約3ヶ月に起きたヒューマノイドの事故だろう。ヒューマノイドが自らのマスターを死に至らしめたのだ。その事件をきっかけに、最近ヒューマノイドの誤作動が数件確認された事がわかった。

原因は設定ミス。一時的にマスターの登録が解けてしまったのだ。マスターの家にいない状態で、認証された人間でもない人間がマスター宅にいる。この状態をヒューマノイドは異常と見て、警報を鳴らし、対象の人間のいる部屋の鍵をロックした。たまたまその瞬間、そのヒューマノイドのマスターは左右から閉まる扉の中央に立っていた。扉はロックされ、身動きの取れない状態になったマスターは、高齢で、心臓に持病を持っていた。

不幸な偶然が重なったとも言える事件である。発作を起したそのマスターは亡くなった。おそらくマスターが亡くなって直に、ヒューマノイドはマスターを再認識し、生命活動の停止を確認。マスターを扉から解放し、ベッドに運んだ。警報に駆けつけた警官は、亡くなったマスターと死亡届をプリントアウトしているヒューマノイドに出くわした。彼らはマスターの身体についた痕を不審に思い、防犯カメラを調べ、今回の事件が発覚したというわけである。

私は役所を出ると、最寄の病院に連絡を取り、マスターの家まで来てもらう事にした。

*

私が家に帰ると、タイミングよく花屋の車が来た所だった。帰宅は予定より遅れていたが、幸い棺の届いた様子もなかった。

私は花屋から花を受け取り、氷室に運んだ。マスターの周りを百合でうずめる。

ややあって、棺が届いた。それも氷室に運び込み、マスターを中に入れた。空いたスペースを花で埋める。

それから大分経って、人間の医師がふたりと医療用ヒューマノイドがやって来た。23年前に登場した医療用ヒューマノイドのお陰

で、医師の仕事はないも同然という公然の秘密通り、医療用ヒューマノイドはマスターを老衰による死亡と断定。医師たちは医療用ヒューマノイドがプリントアウトした死亡診断書にサインをして帰っていた。

「綺麗には綺麗だがこれは……また凄い香りですなあ」

と、医師のひとりが帰り際、そこを埋め尽くす百合に小さく漏らした。

＊

私には匂いの概念がない。

匂いとはいかなるものなのだろうか。

こればかりは説明できないとマスターは言った。

理解は出来なかったが、私は氷室に充満しているらしい百合の“香り”を感じ取ろうとした。形として鼻はあるが、嗅覚を要しない私には無意味なものだ。実質的な機能はない。口も同様で喋る以上の機能はなかった。

それでも人間が呼吸をするのを見よう見まねでやってみる。

特に何も起きない。

私はマスターを見た。

何故マスターは私に嗅覚を備え付けてくれなかったのだろうか。
答えはわからない。

また、マスターが起き上がって私にその機能をつけてくれる可能

性がない事もわかっていた。

翌日、死亡届を受理されたマスターを埋葬した。

私はマスターの墓に花を飾る。何故そうしているのかはわからない。行動原理の不明な行動は慎め、とマスターに言われていたが、行動原理はあるような気もしていた。自分の考えがよく分からない。故障の前兆かもしれない。

そして同じく故障めいた思考で私は思う。マスターが生き返る確率は本当にゼロか、と。

明日

私には年下の、可愛い恋人がいる。

＊

私はよーちゃんと呼んでいる。よーちゃんは私をナツキ、と呼び捨てにしていた。それが歳も身長も私に勝てないよーちゃんなりの、精一杯の背伸びらしい。大人ぶりたい年頃なのだろう。無理に私の煙草を吸おうとしてはむせ返るよーちゃんを　実はまだギリギリ未成年だが、他人の事をどうこう言えないので注意しないでいる、私は心底可愛いと思う。

よーちゃんは専門学校生。私は商社マンだ。

出会ったて間もない頃はまだ、私はよーちゃんを名字で桜井さんサクライと呼んでいたし、よーちゃんも私を名字で立木さんタチキと呼んでいた。

それがいつからよーちゃん、とナツキになったかは記憶していないが、私がよーちゃんをよーちゃん、と呼ぶようになったきっかけは、私の悪友、芹澤隆文セリザワタカフミだった。

そもそも彼が、年甲斐もなくよーちゃん、などと呼び始めたのだ。私もその内つられてよーちゃん、と呼ぶようになってしまった。よーちゃんも「今までそんな風に呼ばれた事がない」と嫌がっていたが、その内慣れてしまったようだった。

私とよーちゃんを引き合わせたのも、同じく隆文だった。よーちゃんちゃんは隆文の親戚の友人の親戚の子どもだとかで、隆文自身とは一切関係がなかったが、ちょうどよーちゃんの通う専門学校の近くに

居を構えていた隆文が、上京してきたてのよーちゃんの面倒を任されたのだそうだ。

隆文は隆文なりによーちゃんを心配していたらしく、何くれとなく世話を焼いていた。それにしたって、教えてもいないのに「お前よーちゃんとデキたな!？」等と心臓に悪い質問をされた時には心底寿命が縮まると思った。まったく良く見ているものだ。

その内、私とよーちゃんの間で、同棲する事が決まり、やはりひとつ屋根の下で男女が暮らそうというのだからケジメはつかねばなるまい、とよーちゃんの両親に連絡を取る事になった時には、更に寿命が縮まるかと思った。

今だから笑い話で済むが、当時は真剣によーちゃんの両親に殴られるのを覚悟していた。健気にもよーちゃんが「そんな事はさせないから」と言い切った時には不覚にも涙ぐみそうになったものだ。そんな健気なよーちゃんに、夜な夜な、仮想よーちゃん父に「ウチの子をたぶらかしおって!!」と怒鳴られる夢を見ているなどとは言えず、胃に穴が開く日も近いかと悩んでいた。

私の顔色がそんなに悪かったのか、よーちゃんは電話での連絡にしよう、と言ってくれた。

が、すべての予想に反してサバけた性格らしいよーちゃんの両親からの反応は「ご迷惑おかけしますねえ、ウチの子を宜しく頼みますよ」という私へのメッセージと、「うまくやんなさいよ!」というよーちゃんへの激励の科白　受話器から音が漏れて聴こえたのだ　だけだった。あまりのあっけなさに、夢ではないかと頬をつねったくらいだ。

まがりなりにも、未成年の両親がこんなことでいいのだろうか。

＊

「ナツキ！ 朝飯できたぞ！！」

煙草をくわえて回想していると、戸口からよーちゃんの顔がのぞいた。

専門学校で男くさい連中に囲まれているからか、はたまたイキがつているのか。近頃よーちゃんは口が悪い。上京したての可愛らしくて初々しいよーちゃんはどこへ行ってしまったのか。私は本当に悲しい。

「ナツキ……聞いてるか？ オイ」

「よーちゃん、その話し方やめようよ。可愛くない……」

私が嘆くと、よーちゃんは顔を真っ赤にしてつけていたエプロンをむしりとった。

「か……可愛くなくて良いッ！！！ それより飯だ！！」

よーちゃんはいつも赤くなってそういうけれど、もちろん私から見たら可愛い方が良くに決まってる もう十分可愛いけど。

顔を膨らませてよーちゃんが行ってしまうと、私は苦笑しながら立ち上がり、煙草を灰皿に押し付けた。

リビングに行つて、後ろから抱きしめる。耳元にキスすると、あっさりとよーちゃんの機嫌は直ってしまった。……そういう所も可愛い、と言う度に隆文に「彼女のいない奴の前でノロケるな！」と怒鳴られる。

ふたりでご飯を食べ終わると、よーちゃんは慌てて準備をし、専門学校に行ってしまう。隆文の家よりも専門学校から遠い私の家か

らだと、食事を食べたらずぐ出かけないと一限に間に合わないのだ。引越そうか、と言った私を押しとどめたのはよーちゃんである。

よーちゃんが出かけてしまうと、私は大急ぎで食器を片付け始めた。普段の二倍くらいの早さだ。天気予報を見る間も惜しみ、私は家を飛び出し、朝早くから開いている100円均一へ飛び込んだ。

明日はよーちゃんの誕生日なのだ。

三月三日。

よーちゃんは嫌がるけど、ひなまつりが誕生日なんて可愛いと思う。

私は、クラッカーを初めとするパーティーグッズを買いあさった。明日、ふたりでパーティーをやるつもりなのだ。もちろんよーちゃんには秘密にしてある。こういう事は驚かせたほうが楽しい。

それに、よーちゃんは徹底したワリカン主義者だ。“ナツキに養われているつもりはない”を信条に、食事もデートもみんなワリカン。一応そこそこ収入のある社会人としては実に悲しいが、よーちゃんとはかく私の財布に頼るのが嫌いだった。同棲する時には、家賃も半分払うと言って聞かなかったのだが、バイトをたくさんして無茶をして専門学校生の本分を忘れたり、病気や怪我をしてしまう方が嫌だ、と何とか説得したのだ。それでもよーちゃんは後払いを考えているらしく、こっそり貯金をしているのを知っていた。

もちろん一日デートして、夜景の見えるレストランでのディナーも捨てがたいが、そんな些細なことでもよーちゃんと喧嘩をするのもよーちゃんのプライドを傷つけるのも、よーちゃんの稼いだお金を無駄に浪費させるのもまっぴらだった。場所や金額が問題ではない

のだから、別に祝う場所は自宅だって構わない。

一通り必要と思われるものを買うつと、私は最後に切り絵でバースデイケーキが描かれたグリーンディングカードを買ひ物カゴに入れた。全てを買い終わると、急いで最寄り駅に向かい、荷物をコインロッカーに放り込む。家に戻っている時間は流石になかった。

*

お昼休み、私はよーちゃんバースデイ計画を煮詰めていた。

今日帰る前にプレゼントを選び、パーティグッズと共にそつと家に運び込む。私より帰宅時間の早いよーちゃんには、先にお風呂に入るよう携帯に電話でもしておく事にする。夜中に料理のある程度の下地を作っておき、隠しておく。

翌朝、よーちゃんを送り出したら、即座に飾り付けをし、家をでる。帰宅途中ケーキと追加の料理を買って帰り、パーティをする。

完璧だ。

そう思ってから、ひとつ忘れていた事を思い出す。

朝買ったバースデイカードに名前を書き忘れていた。明日の朝はバタバタして、書く時間はないだろうし、このカードは、帰宅したよーちゃん宛にパーティの招待状の形式を取るつもりでいた。

隆文あたりは臭い、と一蹴するかもしれないが、私はこういった演出が大好きなのだ。

カードを前に万年筆を取り出すと、私はカードの白い部分にメッセージを書き込んだ。

明日が楽しみで仕方ない。早く明日にならないだろうか。
早くよーちゃんの驚く顔が見たい。

わくわくと私はカードを折りたたむ。
カードの表に、宛先と差出人の名前欄があった。

早く、明日になって欲しい。

私はわくわくした気持ちのままそこに筆を走らせる。

☐ 桜井 陽平ヨウヘイさま

愛を込めて 立木 夏紀 ☐

家

結婚生活14年と10ヶ月。水晶婚式を目前にして、妻はいなくなつた。

残されたのは10歳の娘と6歳になつたばかりの息子。そして不甲斐ない私。

*

見合いではなく、恋愛結婚だった。エレベーターガールだった彼女。そのデパートのおもちゃ売り場で働いていた私。

休憩の時、時々話すようになり、帰りに一緒に帰ることも多くなつた。彼女のアパートは、私の家の通り道にあり、よく一緒に帰つたものだ。

彼女の25歳の誕生日。私は彼女に結婚を申し込んだ。彼女は泣きながら頷いてくれた。しばらく子どもはできなかったけれど、私は幸せだった。

初めての子どもは、彼女が欲しいと言っていた女の子。名前は、彼女の名前の「深鈴」^{ミズスズ}から一字取つて、「鈴花」^{スズカ}にした。

ふたり目は男の子。彼女は「貴方の名前から取りましょう」と言つて、「朔」^{ハジメ}から取り、「朔哉」^{サクヤ}と言つ名前にした。

私たちは 少なくとも私は幸福だと感じていた。

*

その妻が、失踪した。

ある朝起きると、書置きを残し、妻はいなくなっていた。

妻は天涯孤独の人で、頼るべき両親はいない。私は妻の交友関係も把握しておらず、ただおろおろとするばかりだった。

見かねたのか、私の母が子どもを引き取る、と申し出てくれた。まだ家や車のローンを抱えたままの私には、ありがたい申し出だった。

妻は消えた。

妻の残した書置きを、私は見る事ができなかった。

どんな離別の言葉が書き添えられているのかと思うと、いたたまれなかった。

妻は不幸せだと思っていたのだろうか。

そうだったに違いない。

家で、ただ子どもの世話と家事に追われる毎日。日々それを繰り返し、それ以外の事もできずに。たまの贅沢はと言えば子どもの誕生日などの祝い事だけ。服や鞆を買ってくれる事もない夫。

そんな生活にうんざりしたのだろう。

そんな生活が嫌だったのだろう。

仕事に追われ、家のことは後回しにしてきた。

それを妻は理解してくれていると思いこんでいた。

後で。

また今度。

そう思い、考え、飲み込み、すり潰してきた、妻への言葉や気持ち、は、摩耗してしまった。

かつては確かにこの胸の中にあつたそのカケラも、今は小さすぎて見つけることができない。

それに妻は気づいたのだろうか。

それに、妻は嫌気がさしたのだろうか。

書置きをあければ解るかもしれない答えを、私は引き伸ばした。考えないように、考えないように心がけ、がむしやらに働いた。

妻が私の元を去ってから、三ヶ月が経った。

母は、仕事に打ち込む私の様子を快く思っていないようで、何かにつけては電話をしてよこした。その日も、母は鈴花と朔哉を連れて、家に来た。

鈴花は、臆気ながら、母のいない理由と、自分たちが祖母の元へと送られた理由を察しているようだった。

朔哉は幼すぎてよく理解できないのだろう。久しぶりに帰った自分の家に、喜んで飛び回り、私に尋ねた。

「パパ。ママは？」

「ママは、遠いところにお出かけしてるんだ」

苦し紛れに私はそう言う。

「どこにいるの？」

「遠いところだよ」

居場所なんて知らない。こっちが教えてほしいくらいだ。

朔哉は不満そうだった。

「そつだ、朔哉。お星さまを見ようか」

私は、そう口走った。

そういえば、この所、趣味の天体観測もしていなかった。

*

いつの間にか埃をかぶっていた天体望遠鏡を引っ張り出し、庭先に設置する。仰いだ空に、一番見つけやすいオリオン座を見つけて、そんな事すらすっかり忘れていたのを思い出した。

朔哉は天体観測で機嫌を直したらしく、望遠鏡を覗き込んでは大騒ぎをしていた。

私も、妻がいたころそうしていたように、星座や星団の場所、形、謂れなど知る限りのことをゆっくりと話す。

もう何度も話していると思うのに、子どもたちは飽きない。

鈴花も朔哉も、瞳を輝かせて聞き入っていた。

そういえば、と思う。

私はこんな瞳の子どもたちや、妻を愛していた。

妻がこんな瞳をしなくなったのはいつからだったろうか。

*

その晩、子どもたちを寝かしつけ、母と別れて寝室に入ると、私は妻の残した書置きの封筒を切った。

逆さにすると、真っ先に銀の指輪が転がり落ちてくる。

結婚指輪だった。

中には折りたたまれた離婚届。妻の名前と、印鑑が押されている。

手紙の類はなかった。

妻の怨嗟の声すら想像していた私は、逆に拍子抜けしてがくりと肩を落とす。

妻は、この家にも私にも、何ひとつの感情も残していかなかった。この家に彼女が置いていったのは、しがらみの全てだ。

結婚指輪。

結婚という事実。

夫。

子供。

妻はその全てを捨てて行った。
理由すらも告げずに。

彼女は「家」という閉じた箱の中で過ごしたくなかったのか。
それで、箱の中に全てを捨てていったのか。

「家」に彼女を捕らえていた私を。

「家」に捕らわれている私を。

何故、一言も相談してくれなかったのか。

何故、一言すら置いて行ってくれなかったのか。

もう遅いのだろうか。

彼女はいなくなってしまった。

未練がましく、言葉を交わしたいと思っている自分は愚かなのだろうか。

妻がいなくなってから初めて、私は声を殺して泣いた。

煙草

「ふあひゃ！……つとお！」

謎の声を上げて、アタシはバスの揺れに盛大によろける。

とつさに両手を上げようとするが、既に荷物でいっぱいの両手は上がらない。反射的にふんばろうとした右足が、床を離れる。荷物と自分自身の重みに耐え切れずに、そのまま後ろへ倒れ掛かる。「走馬灯すら浮かばないの！？」と考える間もあればこそ。左足までが床を滑る。瞬間的に体が宙を浮き、アタシは強く眼を瞑った。

ソウマシゲミ
相馬亜美

職業：フリーター。享年二十二歳。

初対面で一度も正確に名前を呼ばれた事のないまま死す。

ああ、何て可哀想なアタシ。

しかし、待てど暮らせど後頭部を背もたれの角にぶつける事も、背中から床にたたきつけられる事もない。

おやあ？ と眼を開けると、見知らぬ男の顔が目前にあった。

「大丈夫ですか？」

腰にくるバリトン。彫りの深い顔立ち。びしりと着込んだ高そうなスーツ。手触りの良いコート、首から垂れる白いマフラー。ふわりと香る苦い香りは多分煙草。何でこんなしみたれたバスに乗ってるんだか全然理解できない、死又程格好良い男の人だった。

半ブリッジ状態の上ガ二股気味のポーズのまま、アタシは思った。

……さっき、もっと可憐な悲鳴を上げておけば良かった。

「だ、大丈夫です！」

ホラー映画もびっくりの速さで海老反りから立ち直り、男の人に向き直る。

「ありがとうございます！」

行儀良く頭を下げようとしたが、重い荷物と、バスの揺れに負けず踏ん張る足のせいで、今にも「押忍！」とか叫びそうなポーズだ。

格好悪い。

恥ずかしくて顔が上げられなかった。

「大丈夫？ 荷物重そうだけど……」

「いえ！ 全然大丈夫です！ アタシこう見えて力持ちで……！！」
あああああ。何を話してる自分！ 落ち着け！ 可愛く可憐な様子で迫るんだ！！ 力技で行け！！

もはや考えている事が支離滅裂な事すら、この時のアタシにはわからなかった。端的に言って、頭に血が上っていたのだ。

「でも、危ないから、僕が少し持つよ」

彼はにつこり笑って言った。

……「僕」！ 「僕」！！ 二十歳過ぎた（多分）男が「僕」！！！！

ツボだった。

マズイ。ヤバイ。どーしよう。助けて。

見ず知らずの男（格好良い）に荷物を持ってもらい、微笑を顔面に張り付けさせながらアタシは思った。

惚れるかも。

後から考えれば、厳密には”惚れた”だ。

確かに惚れっぽい自覚はあったが、よもやバイトに向かう先のバスの中で運命の相手に出会おうとは！

「ありがとうございます」

もう一度お礼を述べて、頭を下げる。相手の手が目に入った。

左手の薬指に銀の指輪。

「……あ」

「？　どうかしたの？」

流石にいきなり「結婚してるんですか？」とは聞けずにアタシは慌ててごまかす。

「え、えつと……煙草お吸いになるんですか？」

「ごめん……臭いかな？　自分では解らなくて……妻にもいつも注意されるんだけど」

質問の形は違っても、結果は同じ。予期せぬ形で回答をもらう。

「いいえ、煙草を吸う方好きですよ」

微笑む。無理矢理、微笑む。実は煙草なんてケムイだけで大ッ嫌いだったけど、彼の吸う煙草なら許せると思った。

ぷしう、とマヌケな音を立ててバスの扉が開く。見れば降りるバス停だった。

彼から荷物を受け取って、もう一度お礼を言う。にこにこ手を振る彼に、荷物のせいで振り返す手もなく、アタシはバスが見えなくなるまで見送った。

それからトボトボとバイト先の保育園へと向かう。アタシのバイト先は伯母の経営する保育園。仕事はただの雑用。今日は少し早めのクリスマススの準備のために、こんな大荷物だったのだ。

保育園につくと、アタシは伯母を探して園長室に向かった。クリスマススの準備品諸々を、倉庫に入れる許可をもらわなくてはいいないからだ。

園長室の扉をノックして開けると、もあ、と煙が漂ってきた。

「……っ」

ケムい。というか眼に染みる。

「伯母さん換気してよ換気!!」

うめいて窓を大きく開け放つ。

コレだから愛煙家は嫌いだ。

紫煙を全て部屋から追い出す。伯母は席を外しているようで、ちようど居なかった。

保育園という特殊な職場の関係上、煙草を吸える場所は限られる。そのひとつが園長室だった。だから仕方がないとはいえ、ここはいつも煙たい。

「も〜っ！ どこ行っちゃったのかしら」

言いつつもその匂いをどこかで嗅いだ気がして、アタシはこめかみをぐりぐり押した。何かを思い出す時、そうすると思い出しやすいような気がするのだ。

伯母の机に放置された煙草の箱。パッケージにはマルボロ、と書かれている。煙草嫌いのアタシでも知っている名前。
不意に、アタシはこの匂いをどこで嗅いだか思い出す。
気付いたら煙草の箱を手にとっていた。

あの男の匂いだ。
微かにコートから漂った苦い香り。

頬が紅潮するのを感じる。同時に、あんなに嫌いだった匂いなのに現金だなぁ、と思う。
にまにまと波打つ口元を押さえられずにいると、突然、予告なく扉が開いた。びくつと震えてとっさに煙草の箱を机の上に放り出した。

入ってきたのは伯母さんだった。

「あにやってんの？」

胡乱気に聞く伯母に、アタシは首をぶんぶん振る。

「なんでもない！」

「んーまあなんでも良いけど。てか窓開けないでよオ寒い」

「それは伯母さんが煙草吸いすぎるからでしょ？」

言いながら、アタシは仕方なく窓を閉める。

何故か伯母さんがひよい、と片眉を上げた。

「ところで、伯母さんの煙草……マルボロだっけ」
「そーよ」

言う伯母さんの眉毛が再び跳ね上がる。

「……何？」

伯母さんの奇妙な表情にアタシは尋ねた。

「んー。亜美があたしの煙草の銘柄知ってたり、興味持ったり、換気終わってないのに窓閉めるの珍しいと思って」

「そお!？」

アタシは慌てて室内を見回す。全く気付かなかったが、確かにまだ少し煙たい。

「何だ。煙草に興味がでたか？」

「そんなんじゃないってば！」

アタシは即座に否定するが 速度が速すぎたらしい。伯母さんがにまにまと笑った。

「彼氏が愛煙家だったとか？」

「違うつてば!!」

「そーかそーか。亜美の彼氏がねえ。興味あるなら持ってたていいよ。あと数本だし」

アタシの力いっぱいの否定を歯牙にもかけず、伯母さんは、アタシに煙草の箱を放って遣す。とつさに受け取ると、伯母さんに返すのが惜しく思った。

アタシは、伯母さんにクリスマスの準備品についての許可を取り、文字通り逃げ出すように園長室を後にしたのだった……。

*

家に帰って、自室に入ったアタシは窓のそばにへたり込んだ。何だかどつと疲れが出た気がする。

そつとコートに手を入れれば、伯母さんに押し付けられた煙草の箱。中には、伯母さんの言ったとおり、まだ二、三本の煙草が入っ

ていた。

じーっと見つめ、彼を思い出す。名前も住んでいる所もわからない、しかも既婚者の彼。煙草はマルボロの彼。

アタシはライターを探して部屋を探るが、もちろん持っているはずもない。仏壇からマツチをくすね、煙草に火をつけた。それだけできつく煙の匂いにする。

アタシは煙草の端を口にくわえて、ちょっとだけ吸い込んだ。
「……つぶ！ げふっ……げほえほげほっ……ぐげふっげほへほげほっ！」

盛大にむせる。

涙が出て、景色がにじんだ。

「不味いよコレ」

呟いて、立ち上る煙の香りだけを吸い込む。

また、同じ時間のバスに乗ってみようと思った。
今度は大荷物じゃない時に。

良い天気

「はいッ！」

そう鋭く声をあげた高瀬美紗タカセミサがトスするのを、俺は漫然と眺めていた。

体操服から伸びる手足は長い。身長も、クラスの女子の中で一番高かった。

「おい、登川！」トガウ

声に振り返ると、同時に真横を同じクラスの橋本翔ハシモトカゲルが抜き去った後。

「この馬鹿！」

その後ろを先刻の声の主
村上聡史ムラカミサトシがのしり声と共にどたどた走っていった。

そーいやバスケの試合中だったか。

我に返ったのと橋本が3Pを決めるのが一緒。

「あはははは！ 何やってんの祐樹」ユウキ

美紗が隣のバレーコートからわざわざ声を上げた。

「うるせー」

怒鳴り返して、村上のパスを受け取る。すぐさま妨害に入る橋本を抜いて 足は遅いが、ドリブルの腕前は部内一だと自負している 先行していた二年生にパスを出す。二年生がシュートを決めた。

同時に甲高い笛が鳴る。

「ハイそこまで！」

顧問の理科教師、キモトアカネ木本茜が声を上げた。

何故顧問が理科教師かというと、ふたりいる体育教師は野球部と水泳部の顧問になっているからだ。

「ンじゃー、今日は職員会議あるからボール片してお終い。女子もその試合が最後ねー」

女子バレー部の顧問も兼任している　練習が同じ体育館だかららしい　木本が、振り返って美紗たちに言う。

俺たちの中学校に女子バスケ部と男子バレー部はない。弱小部なので部員が集まらず、ツブれてしまったのだ。逆に俺の所属する男子バスケ部と、俺の幼馴染、美紗が部長を務める女子バレー部は、毎年県大会まで進む、この辺りではなかなか名の知れた部なのだ。

その内バレー部の試合も終わった。

「ッざい……ッしたア！」

全員で木本に一礼して、部活は終わりだ。

*

「あ、祐樹帰りちよつと付き合って」

部活が終わって、校門をくぐりかけた時、美紗が駆け寄ってきて言った。

「何だ何だ。デートか？」

耳ざとく聞きつけた村上がどこからともなく寄ってくる。

「そんなんじゃねエよ、キャプテン」

というか耳ざとすぎだぞ、村上。

「うん。明日は希ちゃん（しみ）の誕生日なのよね」

希は俺の双子の妹だ。ちなみに女子校に通っているので、学校は違う。美紗は毎年、律儀に希にプレゼントを買ってやっている。

俺にはくれないくせにどういう事だ、と言ったら「アンタは私にプレゼントくれないじゃん」というあっさりした回答が返ってきた。そういえば希は、毎年美紗にプレゼントを贈っている。

「お前が勝手に選べばいいだろ？」

鼻の頭にしわを寄せて嫌さ加減を強調するが、美紗はひるまず言い返す。

「何よ、希ちゃんの買い物には付き合う癖に、私の買い物には付き合えないの？」

「希に付き合ってなんか……」

「希ちゃんに、私がアロマテラピーに凝ってるって教えたの祐樹でしょ？」

そういえば、前回美紗の欲しい物をしつこく聞かれて答えた気もする。

「でもそれは買い物に付き合ったんじゃない」

「まあいいじゃん。アンタの分も一緒に買ったげるよ」

そんなついでのようなプレゼントは嬉しくない。無論、美紗からプレゼントを欲しい訳でもない。

「ほら、行くよ」

勝手に行くことに決まっていた。

*

「ねえ、何がいいと思う？」

美紗が無邪気に　いや、もしかしたら邪気はあるのかもしれない
俺の腕を引っ張る。

「こんなところには入れるか!!」
思わず俺は叫ぶ。

俺が立っているのはストロベリーナントカとか言うファンシーシヨップの前だった。ピンクと赤と白で統一された店内には、もちろん女しかない。

冗談じゃない。

こんなイチゴのクッションが山積みされたような店に入れるか。

「祐樹ってそういうの無駄に気にするよね」。意識しすぎだよ」

お前が意識しなさすぎなんだ、美紗!

向かいのアロマテラピーシヨップ　壁にそう書いてあるからそうなんだろう　の方がマシだ。やっぱり女しかないけど。

「ねーちよつと見てよ」こっちのじゃんこ、こっちのわんこ。どっちが可愛い?」

頭の大きい犬と猫のぬいぐるみを持って、美紗が訊ねる。

そんなもの知るか!

「あ、やっぱりコッチのうさちゃんにしようかな?　いや〜んっコレ可愛い〜!!」

嫌なら抱きしめるのを止める。矛盾してるぞ。

「それより美紗。希の奴、お前に買ったアロマテラピーグッズ見て、自分もやってみたいような事言ってたぞ」

……確か。うる覚えだけど。

「本当！？　じゃあアツチのお店行こう！　実はね、オススメのがあるんだあ」

言いながら美紗が店内に突撃する。あっという間にオススメのブツとやらを抱えて戻ってくる。

「ねーちよつと見てよ、こっちのお花の香りのと、こっちの海の香り。どっちが可愛い？」

透明感のある、ピンクと青のアロマキャンドルを持って、美紗が訊ねる。

………そんなもの、知るか！

*

結局美紗は、一時間近くあてもないこうでもないしたあげく、最初を選んだアロマキャンドルのセットを買うことにしたらしい。

「良い買い物したわ」

「………そうか？」

俺はげっそりと言う。外に出ると空の青さが眼に染みた。

「あっそうだ！」

急に美紗が立ち止まった。

「何だよ、まだ何か買うのか？　もつつきあわないぞ」

「んーちよつと祐樹ココで待ってて。すぐ戻ってくるわ」

荷物を全部俺に押し付けて、美紗はデパート内に取って返す。俺はとりあえず、そこのベンチに座った。

空が青い。ぼやっと眺めていると、突然声をかけられた。

「よ、登川。高瀬とデートだって？」

「橋本……お前それどっから聞いた？」

立っていたのは橋本 翔だった。部活が終わったあと、買い物だか暇つぶしだかに来たんだろう。俺や美紗と違って私服だ。

「我らがキャプテンが吹聴してたぞ」

「村上め。違うツつってんのに……」

後でシメてやる……。

「まあ無理ないだろ。高瀬可愛いし」

「そうか？」

お互いおしめをしていた頃から知っている仲だ。好いた惚れたという感覚がない。恋愛対象として見ていないので、美紗が一般的に可愛いかどうか考えた事はなかった。

いやあでも、十人並みだろ。容姿もスタイルも。

「ホントは、オレちよつと狙ってたんだぜ、高瀬の事」
俺に言っただろう。

「美紗に言えば良いだろう？」

「負ける勝負はしない主義なんだ」
橋本は顔を上げた。

「良い天気だな」

「俺の天気は土砂降りだけどな。荷物もちやられたり待たされまくったり、うんざりだ」

「高瀬と付き合ってる幸せの余波だと思えよ」

だから付き合っていないツツの。

橋本はにやにやしながら立ち去った。
全く、何考えてるんだか。

*

「お待たせ〜〜！」

それからしばらくして、美紗が帰ってきた。

「遅いッ」

「ごめんごめん。ハイこれ」

美紗が何かを放つてよこす。

「なんだよこれ……」

最初に入った店を見た、頭のでかい犬のキーホルダーだ。バスケットのユニフォームを着ている。

「誕生日プレゼント。一日早いけど」

ちっとも可愛くない犬が俺を見ている。

「……コレ綴り間違ってるぞ」

「え！？ 嘘！？」

BASKETBALLが、BESKETBALLになっている。
マヌケだ。

美紗が犬のユニフォームをのぞき込む。

ふんわりと、何か良いにおいがした。

「あ、まあ、ありがたく貰ってやる！」

つかつにもドキドキしてしまい、俺は慌てて大声を上げる。

「何それ偉そう！」

美紗が頬を膨らませた。俺は笑う。いつの間にか空模様も快晴だ。

幸せの余波がスperlミスのぬいぐるみなら、こんな関係も悪くない、と俺は思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6223a/>

あなたにあいたい

2010年10月9日04時56分発行